

第2回 那須塩原駅周辺まちづくりビジョン有識者会議

■ 日時

令和元年 10月28日（月）14:00～16:00

■ 場所

全国都市会館 第4会議室（東京都千代田区平河町 2-4-2）

■ 出席者

有識者委員

- 小場瀬 令二 （筑波大学名誉教授）
- 山 島 哲夫 （宇都宮共和大学副学長）
- 松 岡 拓公雄 （亜細亜大学都市創造学部長）
- 渡 辺 美知太郎（那須塩原市長）

ファシリテーター

- 朝比奈 一郎（那須塩原市経済活性アドバイザー）

■ 議事

（冒頭挨拶）

朝比奈氏：

それではよろしく申し上げます。普段こういった有識者会議というのは堅苦しい感じになるのですが、今日はあえて次第は用意せず、時間配分は議論の様子を見ながら進行していきたいと考えております。

まずは市長の方からご挨拶をいただければと思います。それではよろしく願いいたします。

渡辺市長：

本日もお集まりいただきましてありがとうございます。まず冒頭に、一連の台風、15号から19号、そして21号に伴う豪雨で犠牲になられた方々に対してご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された方々に心からお見舞い申し上げます。復旧・復興に私共自治体の首長は全力で取り組んでまいります。

一方で、那須塩原市に関して、もちろん市内で通行止めになっている箇所は現在もございますし、農業の被害総額も現時点で1億5000万円と算定されております。そうした被害に関しては全力で復旧・復興に努めてまいります。他の地域に比べると、例えば床上浸水や

堤防の決壊等はなく、改めて災害に強い地域であるなど実感しました。

今現在世界的に見ても、気候変動によって気温が上昇し、それによる災害が増えています。それは日本だけではなくて世界各国で言われているところで、那須塩原市としては、栃木県内の市町では初であり、また全国的に見てもそれほど数の多くない気候変動適応計画の策定を進めております。また、気候変動適応センターの創設も視野に入れて、気候変動に強い街というのをしっかり作っていききたいという風に考えております。

特に台風 15 号では風が非常に強くて、例えば送電線の張ってある鉄塔が倒壊して、市内に大規模な停電が起きてしまったという報告が多数されております。前回の視察では、様々な小水力発電からバイオマス発電といったものを見て、委員の先生方からも「まるで自然エネルギーのショールームのようだ」というお言葉をいただきました。そうした再生可能エネルギーにしっかりと取り組むとともに、第一回の有識者会議でもご指摘がございましたように、単に再生可能エネルギーを作るだけではなくてしっかり消費させる、例えば特定の農業に当てるなど、そういうエネルギーの地産地消をしていきたいと考えております。

もちろん自然エネルギー、再生可能エネルギーを増やすということは賛成なのですが、単にメガソーラーを作って都内に送るだけではなくて、その地域地域で小水力発電やバイオマス発電を活用して、那須野が原エリアで大規模な地震や災害が起きても、電力を自分たちで確保できるといったまちづくりをしていきたいということを、今回の災害を通じて改めて実感しました。

今日はこれから先生方による様々な意見交換があると思います。前回に引き続いて大変ためになる議論がされると思いますので、どうか一日よろしくお願い申し上げます。ありがとうございます。

(資料説明)

朝比奈氏：

市長、ありがとうございました。市長の方から「自由闊達に先入観なく」ということですので、そういう形で進めてまいりたいと思います。先ほど「次第のようなものはございません」と申しましたが、お手元には二種類の資料だけをご用意させていただきました。この二種類の資料は、日本を代表する専門家の先生方がいる中で僭越ではございますが、最初の 10 分—15 分だけ復習のセッションを設けたいと思います。その上で議論に移りたいというふうに思っております。

二種類の資料の一方は、前回の有識者会議の議事録でございます。もう一つの方は「第 2 回 那須塩原駅周辺まちづくりビジョン有識者会議資料」ということで、私の方で簡単にご用意させていただきました。まず有識者会議の資料の方を見ていただきたいと思います。

1 ページは「第 1 回有識者会議での視察概要」となります。前回の市長の思いも含めながら視察させていただいた場所について、簡単に復習をしていきたいというふうに思います。

2 ページ目からが実際視察させていただいた場所についてですが、初めは新青木発電所となります。詳しくは後でご覧いただければと思いますが、外観的には「まさかこんなに落差があるとは」という感想が聞かれました。具体的には 44m の有効落差があつて、土地の特性を活かした形で発電所が設置されており、それが地域の繁栄につながっているという次第です。

3 ページ目になりますが、新青木発電所を見た後、旧青木那須別邸、こちら青木周蔵氏の別邸ということで展示されているわけですが、非常に綺麗な形で保存されており、改めて地域資源について思いを馳せました。すぐ横には道の駅もございまして、こちらは中を見たわけではございませんが、地産地消系の食材が今売られるなど、いろいろ可能性があるのではないか、という議論が少し出ておりました。さらにすぐ横には、中は見学できませんでしたが奈良美智氏の美術館もございました。

次 4 ページ目に移りますが、実際の会議は、ここから那須塩原駅の方に戻った東那須野の公民館で行いました。かなり視察予定が詰め詰めだったこともありまして、昼食時間はわずか 20 分ということでございましたけれども、その 20 分の間で写真の通り、普通の弁当に加えて那須塩原産野菜のチーズフォンデュを堪能していただきました。食のガストロノミーという言葉もございまして、食の可能性を改めて意識し、そして DVD を鑑賞するという形で那須野が原について勉強させていただきました。その後、実際の有識者会議を行いました。

5 ページ目ですが、今度は県の方の畜産酪農研究センターを視察させていただきまして、実際に乳牛が飼育されている様子、そして特にバイオガス発電に繋がっていくような糞尿の活用についてご覧いただき、その仕組みなども説明いただきながら拝見したという形でございます。

6 ページ目になります。その後少し距離はありましたが、車窓から少しアウトレットモール等を拝見しながら塩原温泉郷にバスで移動いたしました。特に塩原もの語り館を訪れさせていただいて、特にこの時期は大正天皇の展示がございましたけれども、皇室とのつながりを意識させていただきつつ、少し色づき始めた紅葉、外観から湯っぼの里など塩原温泉郷の歴史、可能性を中心に視察させていただいたということでございます。

7 ページ目ですが、大正天皇などが別荘として利用されていた塩原御用邸を視察致し、ここでは大変貴重な資料などを拝見させていただきました。

8 ページ目になります。那須野が原博物館では、那須野が原の空間や広がりについて、また那須疏水の開発の歴史についてご説明いただきました。

9 ページ目ですが、最後は黒磯に移動しまして、黒磯の街並みや建設中の図書館などを横目に見ながら、まちなか交流センターくるるへ向かいました。ここではもともと駐車場であった土地が生まれ変わった様子などを見学しています。

以上が視察の概要となります。

次に議事録で前回の議論を簡単に振り返ってみたいと思います。

前回は視察の背景にもなっております、那須野が原全体を意識しながら、議論を進めて参りました。

まず涌井先生から事前にペーパーで頂いたご意見を簡単にご紹介させていただきました。

小場瀬先生からは、那須塩原ならではの観点が大切であり、キーワードとしてチーズ、ワインなどの可能性に言及され、ストーリーの重要性、こういう点を特に強調していただきました。

山島先生からは、那須塩原に精通されているという背景を活かされて、色々なお話をしていただきました。特にきちんとターゲットを絞って、イメージが湧くような形で駅周辺のまちづくりをしていく必要があるとのご意見がありました。宇都宮の LRT の例なども出していただきながら、まちづくりは時間をかけてしっかりとやっつけようというご指摘がありました。

松岡先生からは、まちを愛する住民の基本的なスタンス、まちへの愛の活用が重要であることのご意見がありました。これが「自律」、すなわち立つではなく律するとした自律こそがまちづくりを行う上で重要であることのお話をいただきました。

以上が第一回有識者会議でご議論いただいた概要であります。

それでは本日の議題に移りたいと思います。ご議論いただきたい点は大きく2つございます。

1つ目は前回の視察内容も踏まえながら、「那須塩原市の広域での位置付け」という観点でご議論いただきたいと思います。市長の公約にもございますが、広域とは県北という捉え方もございますし、前回の視察先であった那須野が原という捉え方もあります。点で開発・開拓というものを捉えるのではなく、面的広がりを持ちながら広域における那須塩原をどう考えるのかというテーマが大きく一つあります。

2つ目は、そのような広域を意識しながら、駅周辺をどう考えるかというテーマになります。特に前回は駅西口について議論をしましたが、西口に限らず東口、あるいは車窓から眺めた程度ではありましたがブリヂストン跡地も含め、駅周辺全体を意識したご意見をいただければと思います。また、現在西口で予定されている市庁舎の移転予定地について、そこに止まらず市庁舎がどうあるべきか、そういう点を意識しながら、駅周辺を考えていただきたいと思います。

この2段構成を意識する上で、資料10ページ目から那須塩原市の広域の位置付けについて簡単にご説明をさせていただきます。

11、12 ページ目を見ていただきますと、総務省が力を入れて展開をしてきた定住自立圏という考え方が示されています。これは市町村合併までは至っていませんが、中心市を拠点として、様々な政策マターについて広域で展開していこうという発想でございます。

那須塩原市は全国的にも珍しい形で、2つの定住自立圏に属しています。11 ページですが、八溝山周辺エリアでは2市6町を跨ぐ形で定住自立圏を構成しています。12 ページは、那須塩原市を中心市とした、2市2町での定住自立圏となります。13 ページ目ですが、後者の定住自立圏において那須塩原市が中心となる形で、特に交通面、観光面、環境面において協働を行っています。

14 ページは、那須野が原の開拓の歴史になります。那須野が原は水を蓄えるのが難しい中で、先人たちが那須疎水などを苦勞して作り上げ、土地を切り開いて参りました。15 ページ目は、明治貴族が那須塩原の開拓に携わり、現在では生乳で本州一位という酪農地帯へと生まれ変わった歴史についてでございます。

16 ページ目は、市長のご発言にもありましたとおり、那須塩原では自然エネルギーの取り組みが進められていまして、小水力、太陽光、バイオマスなどの自然エネルギーが展開されています。

17 ページ以降は、那須塩原に対象を絞り、駅周辺についての参考情報を掲載しています。

18 ページの那須塩原の土地利用構想を見ますと、市街地エリアから山間・観光エリアまで4つのエリアに分類されます。これは2017年度から施行されている第2次那須塩原市総合計画の中で示されている構想となります。

19 から 21 ページ目は駅周辺における、景観計画、高さ規制、都市計画についての現状説明となります。22 から 24 ページは駅周辺の景観写真です。25 ページには前回の視察時に松岡先生よりデッサンいただいた西口のペデストリアンデッキのイメージ図を掲載しています。

以上が私からの概要説明となります。

それでは、まずは広域について議論を進めて参りたいと思います。小場瀬先生宜しく願います。

(議題1：那須塩原市の広域における位置付け)

小場瀬氏：

那須地域定住自立圏共生ビジョンについては、第三次全国総合開発計画から水系を中心としたエリアというコンセプトが出てきました。これは那珂川を中心として、那須地域を一つのまとまりとして捉える考え方であります。

那須地域定住自立圏共生ビジョンでは那須塩原市が中心地であり、八溝山周辺地域定住自立圏共生ビジョンでは大田原市が中心地となっていますが、いずれにしても川を見直すという作業があるのではないかと思います。車社会となって水系は重視されなくなっており、一般的に農業も衰退してきて、水系というのは人々にとっては重要ではなくなりつつあ

ります。どちらかというとな水系は災害を起こすもののように理解されているのではないのでしょうか。しかしながら、水系を念頭に置いて物を組み立てていくという考え方はこれからも重要です。

那須塩原には那須野が原の開拓の歴史がありますが、それ自身が一つの水系の物語であります。資料の18ページで土地利用構想図がありますが、これは鉄道や高速道路の交通の発想で描かれたものです。これを水系で見直すと縦の方向にエリアが3つくらいに分かれます。これからは観光が重要であるため、地形地物を大切に、水系を中心とした考え方を取り入れる必要があります。明治からの開発は従来水系的な視点からエリアを見てきました。

朝比奈氏：

水系という観点を取り入れて成功した事例はありますか。

小場瀬氏：

一番有名なのは滋賀県の近江八幡市ではないでしょうか。水系をもとにした産業があったり、ヴォーリズという建築家が素晴らしい建築物を建てていて、それらを再生する形でまちづくりを行いました。那須塩原においても明治の元勳が建てられた建築物など、大きく言えば水系に従って建てられている訳です。

那須塩原の疏水についてインターネットで調べてみると、一部は公園の中で綺麗にされているところがあるようで、水系を大切にするという発想はすでにお持ちなのかなと思います。

山島氏：

水系の話ですが、那須塩原の場合は水系が地下に潜ってしまっているのが、そこが難しい点かなと思います。

資料12ページの定住自立圏を見ていただくと、那須塩原市は県北の中心であり、那須地域の中心でもあります。那須塩原駅は、那須塩原市民にとってどういう位置付けであるか、また外から来る人に対してどういう位置付けであるか、これら双方の観点が必要となります。市民にとっては自然体で集まることのできる地域であるし、観光客など外からの人にとっては表玄関としての交通の結節点であります。

松岡氏：

最近環境問題がものすごい勢いで変わってきており、実際に災害などで変化を体感するような時代になってきました。那須塩原は中でもタフに耐えてきているのかなと思います。

資料の 18 ページを見てみますと、まず北東から南西に向けて物流が流れているわけですが、この物流の道筋に対して並行に森とか平地とかが並んでいるのは、非常に特徴的であると思います。遠くを見ると地形に段差があって、素晴らしいスカイラインを形成しています。

先ほど近江八幡の事例が出ましたが、近江八幡でも自分たちが持っている物を十分に活用できていなかった。それを市民の手で活用するようになって観光地として育つことができました。

那須塩原は確実に自然でいい物を持っているので、あとは人の問題になると考えます。黒磯と西那須の真ん中に新幹線の駅がある訳ですが、それを真ん中に無理やり何かポテンシャルを持ってきて、それぞれを結び付けようということはしなくて良いと思います。むしろ黒磯と西那須のそれぞれの特色や素材を活かしつつも、駅周辺で交流していける場所を設け、それが那須塩原の観光圏にとっての顔となるような形が良いのではないのでしょうか。

渡辺市長：

皆さまお忙しい中、那須塩原のことを熱心に研究して下さっていて大変感銘を受けております。

小場瀬先生から水系のお話がありました。那須地域定住自立圏共生ビジョンの中では公共交通が重点項目の一つとされていますが、例えば那珂川町の方も東京で買い物をする場合は那須塩原駅を利用することになりますので、駅までのバスを充実させる事業がこの中には入っています。交通を水系で例えると、那須塩原駅は交通の源泉に当たるポイントであると思います。

まちづくりをするにあたり水系は非常に重要です。他の地域の事例ですが、地域名に何かネガティブな意味合いが含まれていますが、例えば山崩れなどの災害が起きやすい地域であるなど、先人たちが身を以て体験したことが地名となっていることが伺えます。そういう意味で、那須塩原においても水系をしっかりと考えた上でまちづくりを行う必要があります。

山島先生と松岡先生からは、駅周辺は人が集まる場所という観点を挙げていただきました。おっしゃるとおり、旧黒磯市には黒磯の中心地、旧西那須野町には西那須の中心地がございます。また、那須塩原市には那須塩原全体でやるというお祭りはありません。昨日は巻狩まつりという大きなお祭りがあったのですが、もともとは黒磯市のお祭りでした。もう一つは、ふれあい祭りというお祭りがありますが、これはもともと西那須野町のお祭りです。それぞれ那須塩原の大切なお祭りであるものの、那須塩原全体が一体となるようなイベントにはなっていません。それを行うのであればやはり那須塩原駅前が適地なのではないでしょうか。物理的な中心地はともかくとして、駅前を市民の方々のアイデンティティの中心地として考えていかなければならないと感じます。

(議題2:那須塩原駅周辺について)

朝比奈氏:

ありがとうございました。それでは続きまして、那須塩原駅前のあり方という2つ目の議題に移りたいと思います。前回議論しました駅西口から少し視点を広げて、東那須野公民館などがございます東口なども含め、広域的に駅周辺をどう考えていくか議論をしていただければと思います。次は小場瀬先生からお願いします。

小場瀬氏:

まず1点質問がございます。定住自立圏構想の中で中心地が大田原市になるのか那須塩原市になるのかわかりませんが、交通の要という観点からは那須塩原市が中心となって然るべきです。市民の方々は那須塩原市以外の人も含めて車社会となっていますので、観光という観点からいうと首都圏からマイカーで来るという観光客も多いと思います。これからは外国の人も何とか呼びたいというのがあると思いますが、そうすると車だけではなくてバス交通が重要となってきます。バスのネットワークはこの定住自立圏構想の中に組み込まれているのでしょうか?

山島氏:

構想の中でバスルートの検討などは行なってきました。ただ課題として那珂川町などはそもそも人口が少ないこと、またコミュニティバスを走らせてもやっぱり車を利用してしまふなど、なかなかバスを定着させるのは難しいのが現状です。

松岡氏:

兵庫県の山奥で実施されている事例として、高齢者対策として地域全体で実質的な白タクをやったり、ボランティアの人に頼んで高齢者の運転代行をしたりしています。国土交通省もこれらの活動を認めています。どう考えても採算が合わないというのはごもつとも、地域住民によるサポートを構築していかなければ成り立ちません。それは那須塩原でも同じではないでしょうか。

ソフトとハードを組み合わせせて行政が後押しすれば、それほどお金をかけずに実現できるかと思います。

渡辺市長:

那須塩原市と那須町では観光客向けのライドシェアサービスの実証実験を行っています。

先生のおっしゃるとおり、どこの自治体でも公共交通のあり方は考えていかなければいけないテーマです。我が市でも高齢者が外出する際のタクシー料金助成事業を行っています。やはり財政面で負担となります。政府が推進しようとしているスーパーシティ構想

で自動運転を部分的に取り入れるなど、テクノロジーを活用したコンパクトシティも今後は考えられると思います。

朝比奈氏：

那須塩原駅周辺のあり方について、先生方からは公共交通と観光の2つの観点を出していただきました。公共交通というのは地域にお住まいの方、観光は外部から来られた外国人などの方が対象となりますので、双方はあまり連動していません。それぞれの観点から議論いただき、那須塩原駅を交通のハブとして、住民の方も旅行客の方もそこから移動できるようなまちづくりができれば良いと考えます。

市長からご発言があったとおり、近年テクノロジーが発達してきております。私も先日那須塩原市的那須町で実証実験が行われているライドシェアサービスの「CREW」を体験させていただきました。これは対価ではなく、お礼としてサービスを行っていますので白タクの扱いにはなりません。これにより本来は家まで5000円くらいかかるようなところを、3000円だとか、もしくは自由に設定した料金で移動することができます。

将来的なテクノロジーの進歩を見据えながら、ハブとしての那須塩原駅周辺というところを意識していく必要があるとのご意見であったと思います。

小場瀬氏：

外国人観光客の方の多くはジャパン・レール・パスを使って新幹線で移動されていますが、那須塩原駅は新幹線の駅としてその強みを活かすことができます。

住民と観光の交通では質の違うところがありますが、広域的な交通ということで考えると、テクノロジーを使った交通というのは将来的に非常に魅力があります。

渡辺市長：

那須塩原駅の西口ロータリーは当初はバスを停めるためにスペースを広く取りました。しかし、現在はマイカーの駐車に多く利用されており、バスが停車できなくなるなど、当初の想定とは違った状況になっています。お子さんを駅に送るとか、配偶者の方を駅に送るとか、車の利用が多くなりロータリーが手狭となっています。

このように当初の考え方とずれてきている現状も踏まえて、駅前のあり方を考える必要があります。

松岡氏：

確かに生活と観光の交通は分けて考えなくてはなりません。例えば、台湾に行くと観光用のバスはすごく分かりやすく、青いバスと赤いバスの2つがあります。それで1日の利用料金が一律で、まちの中の主要な箇所が結ばれていて、乗り場に行けば次の観光地にすぐ行けます。まちをどう繋いでいくかが観光のポイントとなります。

生活の面でいうと、滋賀県の事例でコミュニティバスは空気を運んでいるという批判があるなど、限界集落などへの移動手段の確保はとても大変です。那須塩原はそこまでの状況ではありませんが、利用者にとって分かりやすい形にするのは重要です。例えばウィーンではあと何分でバスが来るのかバス停に数字で示されています。

山島氏：

私は車を持っていませんので、那須塩原の温泉や旧青木邸に行くにはバスを利用するのですが、時刻表を見てもバスの使い方が分かりづらいつ感じます。しっかり整理していけば、主要な観光地を分かりやすく巡るようなバス路線は出来るのではないのでしょうか。一方で住民にとってのバスというのは観光地を巡るものではないので整理が難しいです。

駅前交通を考える上で、表玄関として観光地を巡る路線を配置していきますが、山間地の路線なども含めて議論をしてしまうと、恐らく分かりづらくなってしまわないのでしょうか。

駅前を表玄関と捉えるならば、訪問した人が大田原市や那須町まで簡単に行けるような形にしていくことが大切です。

朝比奈氏：

おっしゃるとおり、駅前でバスというとホテル送迎のバスというイメージがありますが、もっと観光地を巡れる二次交通拠点としての位置付けが重要だと思います。

山島先生からは、表玄関という印象深いお言葉が挙げられました。駅前は無理やりみんなを集めてくる場所ではなく、西那須と黒磯のそれぞれの基本の拠点がありながら、広場としてみんなが集まることができるような、そんなあり方をご提示いただいたと考えています。改めて、表玄関として那須塩原駅周辺がどのようなまちになれば良いか、お考えをお聞かせ下さい。

山島氏：

資料 23、24 ページの図面を見ていただくと分かりますが、駅から降りて表玄関としてはがっかりするような印象です。だからと言って大きいビルを建てようというのは間違いです。前回の有識者会議では「まちなか交流センターくるる」を視察しました。あの程度の規模の施設があって、そこに行けば地域全体のことがよく分かるというようになれば、雰囲気は断然変わります。大きな投資をする必要はなく、くるるのような施設が駅前にあればイメージが変わってくるのではないのでしょうか。

朝比奈氏：

ありがとうございます。那須塩原の表玄関なので駐車場は見えなくしつつ、地産地消の野菜が見られたり、ミルクスタンドがあったり、あるいは元勲など明治の歴史を知る施設

があったり、そういうものがショールーム的に感じられる機能があれば良いというお話であったと思います。

松岡氏：

もう一つ、土地をどう活用していくかという基本的なテーマがあります。駅東口の広大な土地、西口の市庁舎の建つ土地、これらの全体な連携を考えていかなければなりません。それによって出てくる要素も変わってくるかもしれません。

基本的には資料 23 ページにあるようにスカイラインが非常に綺麗なもので、これを那須塩原の第一印象である顔として、来た人たちに覚えてもらえるかが肝心です。

イギリスのロンドンでは街中の公園には建物を建てるのが禁止されており、ニューヨークのセントラルパークも建物は建てられません。那須塩原駅前もそのような土地を確保して、駐車場や観光バス、植栽やちょっとした絵になるカフェなどが配置されている、そのような計画が目に見えてきます。

資料 25 ページに掲載されているスケッチに関しては、ちょっと大胆ですが、今あるデッキをさらに伸ばしていけば駐車場を含めて下を見えなくすることができます。その人工地盤であるデッキに立った時、下にあるものが塞がれて、上には緑だけが見えます。デッキの上は緑化されていたり、ちょっとしたイベントのできるスペースがあったりして、その向こうに山が見えると、ここが那須塩原かという第一印象を持って貰えます。

そのデッキには大きな穴が空いていて、そこを降りていけばタクシー乗り場があるなど、そのような形もあるのかなと思います。

小場瀬氏：

駅前には広場がありますので、そこを再整備して大きな緑地を確保するのは面積的には可能です。バスや車の利用者全員が駅の真ん前で降りなければいけないとは思いませんので、多少離れたところから降りて駅に歩いて行って貰うという形にすれば、松岡先生のおっしゃるような計画の余地はあるのではないかと思います。

JR の大分駅や延岡駅なども駅前に大きな緑地帯があり、そこでイベントなどが開催でき、観光客を迎え入れる表玄関としても機能しています。

以下は私のアイデアですが、駅を降りると並木が素晴らしくて、かつ天皇と関係のある場所はどこかなと考えてみたところ、檀原神宮や明治神宮があります。戦前だからこそできたのかもしれませんが、一般国民から何万本もの木を集めて、青年団が植林をしたことで、現在では素晴らしい並木となっています。

那須塩原も 200 年計画くらいで、非常に立派な並木を育て、駅を降りた人が感動してしまうようなものを作ることがあってもいいのかなと思います。それを市民参加、国民参加として旗を立ててみてはいかがでしょうか。日本一の並木を作ろうというムーブメントを

市が率先して起こしても良いかと思えます。令和の時代も始まりましたし、タイミング的には悪くはありません。

森林の里親促進事業みたいに企業から植林の寄付を募れば、企業は大切に並木を育ててくれるかもしれません。

朝比奈氏：

松岡先生、小場瀬先生より非常に象徴的なお話をいただきました。

会議の後半は市庁舎の建て替えも含めて駅前のある方を議論していただき、また市長から次回の有識者会議からお招きするオブザーバーについてのご意見もいただければと思います。

(議題3：市庁舎の建て替え等について)

松岡氏：

先ほど並木の話が出ましたが、それが市庁舎と駅を繋げられると一つのものにできて面白いと思えます。自然の中に先端的なデジタルを組み込み、例えばスマホをかざすと目の前の山の名前が表示されるなど、そのようなソフト的な仕掛けも考えられます。あまり大きな案内など出すことはせず、なるべく自然なままにしておくのが得策です。

山島氏：

市庁舎と駅の距離が少しありますが、人は気分の良いところを歩いていると距離感を感じません。市庁舎まで繋がる道も駅中央に通す必要はありません。

市庁舎というのは市民が集まる場所です。色々なお祭りやイベントをやるとすれば、市庁舎の周りのスペースを利用できます。例えば栃木県の下野市役所は市の中心に位置する訳ではありませんが、市役所の周りで色々なイベントが開催されています。

那須塩原駅周辺は那須塩原の人が集まって何かやろうという感じではありませんが、せっかく市庁舎を作るのであれば、人が集まって何かできる場所というものができれば、凄く一体感が出てくるのではないかと思います。

朝比奈氏：

NPOの拠点が市庁舎の中に入っていたり、また市庁舎の中もコミュニティーが集まりやすい場所にしてあるなどの事例も全国には見られます。まさに市役所は市民の活動の結節点という意味合いが重要です。

小場瀬氏：

市役所は英語では City Hall と言いまして、日本語に直訳すると市民のホールという意

味になります。まさしく英語では市民が集まる場所というのが市役所ということになります。

近年の市役所の流れとしては、駅前に市役所の出張所の機能があったり、スーパーマーケットの中に市役所機能の一部があったりと利便性が高まっています。市役所の一階にあるような住民票を取りに行くなどの手続きは、わざわざ市庁舎まで行かなくても済むようになります。

そういう意味で言うと、市役所に最後に残る機能というのは市民ホールとしての市役所になり、市民の交流場という機能に重点が移っていくことになるでしょう。ただ問題は、市役所の前に広場があって大きなイベントをやろうと思うと、千人や一万人規模の物凄い人数が集まることになります。この場合、みんなが一人一台の車で来るとなると、駐車場がパンクします。市役所の駐車場だけで全て処理するのは無理ですので、駅周辺の駐車場を活用する必要があります。できるかどうか分かりませんが、ブリヂストン跡地を活用して、イベントの時はソーラーパネルの下に駐車ができるような方法があってもいいのかなと考えます。

土浦市の花火大会では、イベント時は街中の小学校や中学校などの公共施設の駐車場が開放されます。そのプログラミングは大変だと思いますが、何か仕組みを考えないと、市役所だけの駐車場ではイベントには対応できません。市民ホールの意味合いを持たせれば持たせるほど、周りの駐車場の活用を検討する必要があります。

いわゆる単純な市民サービスは情報化されて、家でも手続き出来るようになるかもしれません。その点も踏まえて新しい市庁舎のあり方を大いに議論すると良いと思います。

朝比奈氏：

タイムズと市役所が連携して、イベント時の駐車場対策を行っている事例もあります。

松岡氏：

市庁舎そのものについては何年後をターゲットにするかが重要です。人口は減っていきますので、職員の数が将来的にどれくらい必要かという議論が出てきます。

小場瀬氏：

人口が減ることで自治体の合併が行われ、逆に市役所機能を強化しなければいけないということも想定されます。

松岡氏：

その辺をどう見据えるかが大切ですが、今の人口規模のまま将来の市役所機能を考えるのはやや疑問が残ります。

市役所の作り方に関して言えばあらゆる方法があります。ヨーロッパに行くと市役所に

は基本的な3点セットというものがあります。まずは塔があって、その中にホールがあって、外に大きな広場が設けられています。これら3点がセットでシティホールとなります。

日本に合ったやり方を考えなければいけません、NPOの活動に使えるとか、無駄なスペースができないように計画する必要があります。そうすると市庁舎の規模が大体決まってくる、広場のスペースがどれくらい必要かなどの計算ができます。

市庁舎そのものは高層である必要はなく、山並みや景観にマッチした外観であるべきです。駐車場についても、市庁舎の周りを全部駐車場にして、どこからでも市庁舎へ入って行けるというデザインも考えられます。市庁舎の真ん中には吹き抜けがあって、市庁舎に入るとどこからでもカウンターで迎え入れられるような、全方向に対して裏表を作らない設計もあり得るのではないのでしょうか。

山島氏：

市庁舎を作った後に足りなくなるのは会議室です。国の役所や宇都宮市でも会議室が足りなくて外の会議室を使ったりしています。

人口が減ったからといって職員が極端に減るということは無いかと思います。もし余裕ができたら会議室のスペースを別の用途で使うとか、30年程度で考えるとそれほど職員規模を神経質に考える必要は無いかと考えます。松岡先生がおっしゃるとおり、高さは一定の高さに抑えておかないと背景の山並みとマッチしません。

どこからでもオープンに入れる市役所という点については、栃木市役所や長岡市役所をイメージします。色々な事例を集めてみると良いのではないのでしょうか。

朝比奈氏：

最近ではRPAと呼ばれるロボットによる業務自動化という流れがある一方、自治体の合併によって市役所機能が大きくなったり、また行政ニーズに対応して新たな課ができたりと、両方のベクトルがある中で先を読みにくい点もございます。何年先くらいを想定して、どういう形に持っていくかという議論が求められます。

先生方から色々なご意見が出されました。地産地消で色々なものが玄関口で楽しめるレストラン、広大なペDESTリアンデッキで広場的機能を持てるもの、将来像次第ではありませんが駐車場機能、また並木や遊歩道など、様々なアイデアを伺うことができました。

現在黒磯でも計画が進められていますが、その他で注目される機能としては図書館があります。図書館は今までは物理的に本を読むという場所でありましたが、市民活動の場として活用したり、また美術に特化するなどの新しいスタイルの図書館も出てきています。市庁舎や駅前の議論に加えて、文化的なもの、歴史的なものをイメージさせる機能について、図書館の観点も含めてご意見をいただけないのでしょうか。

小場瀬氏：

私が5年くらい地域活性でお手伝いをした宮崎県都城市では、中心市街地が完全に壊滅し、お店が1軒も無くなりました。そのこのデパートを市民と協力して図書館に改装したところ、年間100万人ずつ来るような施設に生まれ変わり、大変な成功を収めました。

図書館は蔵書を何冊所蔵しているかを誇りとしますが、今は便利な時代になっていて、本を様々な図書館から借りることができます。私は品川区に住んでいますが、そのエリアで図書館は10施設くらいあって、何十万、何百万という数の中から本を選ぶことができます。それも駅の近くに出張所が出来ていて、そこで本を受け取ることもできます。

私は複数の区の図書館の利用者カードを持っていますし、やろうと思えば都全体の図書館を利用することができます。図書館単体としては、もはや本の蔵書冊数から解放されなければなりません。

都城市のケースでは、本を静かに読める部屋も作りましたが、その他はうるさくてもいいので、人と人がコミュニケーションできる場所として図書館を再定義しました。そうすると図書館の作り方がまるで変わります。

加えて、新しい企業を起こしたい人たちが集まれるように、図書館に会議室の機能を設けました。もう一つは、高校生が元気になるような仕組みとして、真面目に机を向かい合わせて座るようなものではなく、高校生がファッションショーや手仕事ができるようなスペースも用意しました。那須塩原駅前図書館を作るならば、先ほどの「くるる」のような交流施設が適しているのではないのでしょうか。

また、チーズやワインなどの生産現場をショールーム的な施設としてリフォームするのも効果があると考えます。カゴメもショールーム的な工場を名古屋に設けているようです。ブリヂストン跡地についても、企業を誘致するのに太陽光だけでは寂しいなと感じます。駅前にこれだけ土地があることをむしろ将来の伸びしろと捉えて、工場を作る時にただ生産するのではなく、生産施設をショールーム的にすることを条件にして産業誘致をするのができれば良いのではないのでしょうか。可能であればそういう工場のショールームの出店みたいなものを駅前に持ってくることであれば面白いと思います。

現在はインターネットで何でも見ることができますが、商品がちゃんと作られている場所を見て、味わう、という経験はネットではできません。

山島氏：

那須塩原駅前でもミルクが飲めないのはもったいないと感じます。前回の視察でいただいたチーズフォンデュみたいなものが味わえるのも良いと思います。

「くるる」みたいな施設で実際に那須塩原の産品を味わえるというような仕掛けが必要です。駅前では宇都宮餃子ではなくて、那須塩原のものが売られて欲しいと思います。また実際に生産している場所も見ることができればイメージはさらに良くなります。

(閉会挨拶)

朝比奈氏：

最後は市長から、今後の有識者会議でどのようなオブザーバーを招くかも含めて、ご意見をよろしくお願いします。

渡辺市長：

先生方から素晴らしい意見をいただきありがとうございます。前回は先生方からご指摘がありましたが、駅前でお酒を飲む場所や、那須を満喫できるエリアを設ける必要があると感じています。

私は議会でも申し上げておりますが、市庁舎については、市庁舎単体でどうあるべきかを考えるのではなく、那須野が原全体や、駅周辺との位置付けを考えながら議論を進める必要があると考えています。駅と市庁舎をどのように繋げるかなど、今日頂いた議論はしっかりと今後の検討材料にしていきたいと思っております。

今後のオブザーバー参加についてですが、駅前は私有地がほとんどでありますので、開発を検討するにあたり民間のディベロッパーの方に来ていただきたいと考えています。本日は高さ制限の話もありました。市長になってから都内のディベロッパーの方とお話しをする機会が多いのですが、企業の方からは駅前開発を行うには高さ制限や容積率を緩和する必要があるとの意見も聞かれます。これは有識者会議の議論とぶつかる点ではございますが、企業の視点から、どうすれば開発に参入しやすいかという意見を聞きたいと思っております。

それから、最近はコンセッションなど PFI の活用が叫ばれておりますので、PFI のご専門の方に来ていただきたいと思っております。また、情報発信という観点から IT 系の企業の方々、まちづくりを手掛けられているコンサルの方々をお呼びできればと考えています。

これは私が市長になる前から考えていたことでありますが、まちづくりは先を見越して行う必要があると思っております。小場瀬先生からもお話がありましたが、昔から那須は広域で市町村を作った方が良いのではないかという議論はございました。定住自立圏を組んでいる自治体の中で合併に前向きな首長がおられることも事実です。いつ実現するかは分かりませんが、先を見越した議論を行うことが重要です。そのような観点から言えば、例えば民間資本で市内にサテライトビルを建てていただいて、そこに市庁舎を入居させるというやり方もあり得るのではないのでしょうか。

これまでの歴代市長が議論してきたことと、先生方のある意味しがらみのない議論を踏まえて、しっかりと駅前周辺のビジョンを作っていくと考えています。

以上